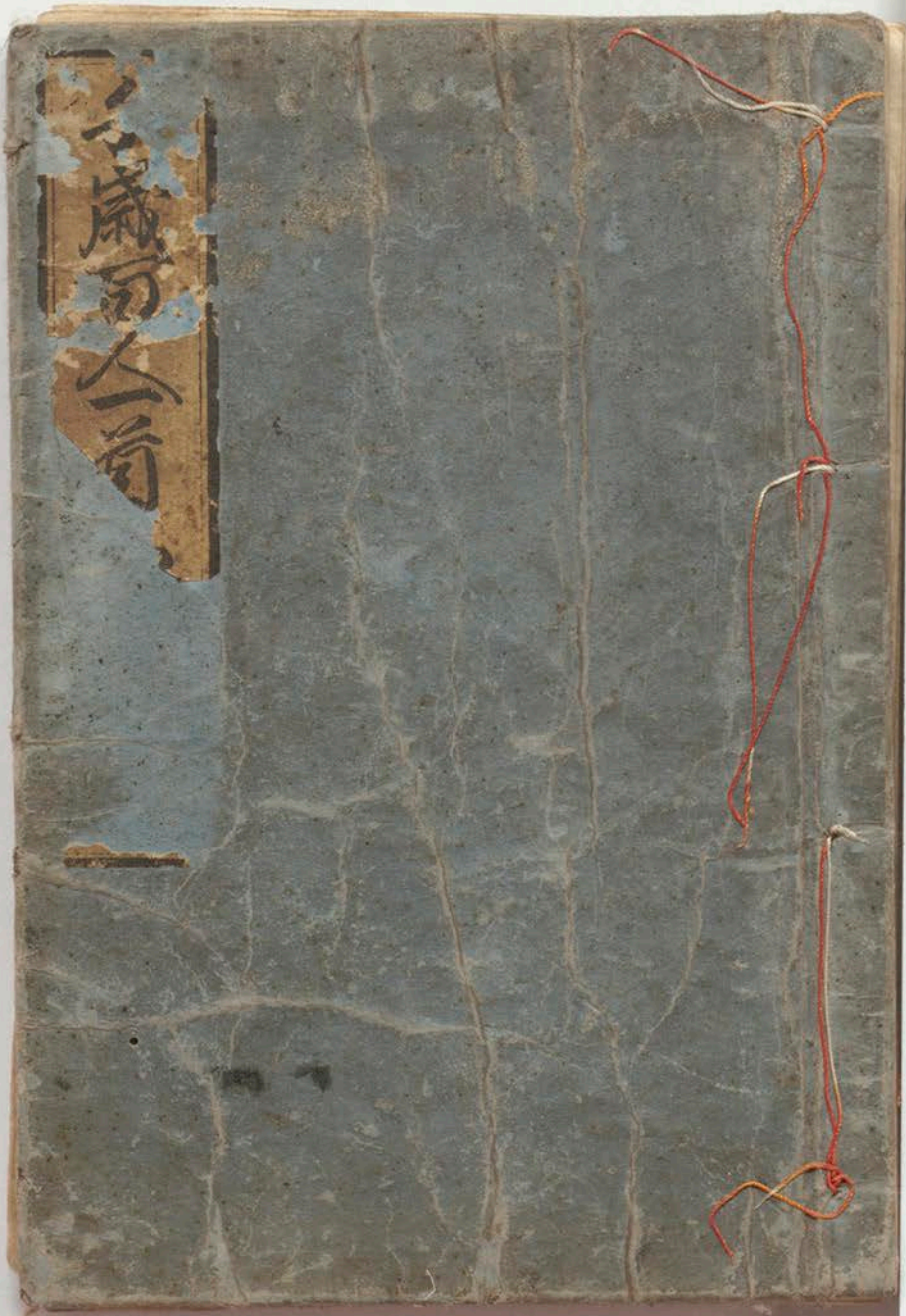


書初乃詩歌

佳辰令月款

世極萬歲千

秋樂未央

君代ちよふ八代

小石の巖とあり

りやうせいなんの うちより

清富不_{ありふ}老_{らう}

大徳云云

前日月遷

万代とて乃白也

よるる天がしと

[illegible]

たふさふさ

玄 傳 者 法 云

水一盞

のちを神とすまふ

乃悉風令之

池凍束頸風

度解窓梅北



親亮
暇を

張

五

親友

有

我來

情

婦人傳
大和言葉

小袖いぢぢ

軟服ハ軟の軟

とんすやハちや

[illegible]

ちんめいふん

常ハ もち かの

皇統のちきり

一 いち 八 はち おひや

あ

米ハ

一、ゆゑに

みそむ

九乙人

一とみさきちん

一 赤飯のこいご

まんぢうちまきのハナ

[illegible]

ふくろ

一あづき餅のあづき

寛得少年長
 乞巧竹竿頭
 上頭線多
 秋の萩成なるの
 とき今もけいん
 乃の心をあきら
 七夕を憂やにりて
 あまの川はさる
 中の淵をぬく人
 たわのこれけの
 まの涙よりあゆ
 忠告のともいそ
 毎まをさそ



くらへおさうり
 結ハ ゆきの
 たいたり
 けいり
 するあさく
 乃さや
 いひさハ月夜
 えいへえり
 小たへ小ひ
 すハさり
 松ひまつ
 くらさなり
 竹のとさけ

や天の川はさる
 夢さき乃橋
 をぬきこれ衣のそい
 こゆへぬきさ
 かな下ろ萩の袖を
 天の川をみちう
 こいひとをさる
 まわしとをさる
 菜乃家あまをさる
 やをぬきさる
 きん娘あまを
 占ふさふ侍と
 被天の河さる
 らんはぬひる



そうあんそろ
 たろふお人
 はん あや
 さんくおでん
 きすへおふ
 あづさあ
 まあはハさ
 ゆのこおゆ
 ひああま
 希ああ
 のりハの
 まあ
 なるひあ

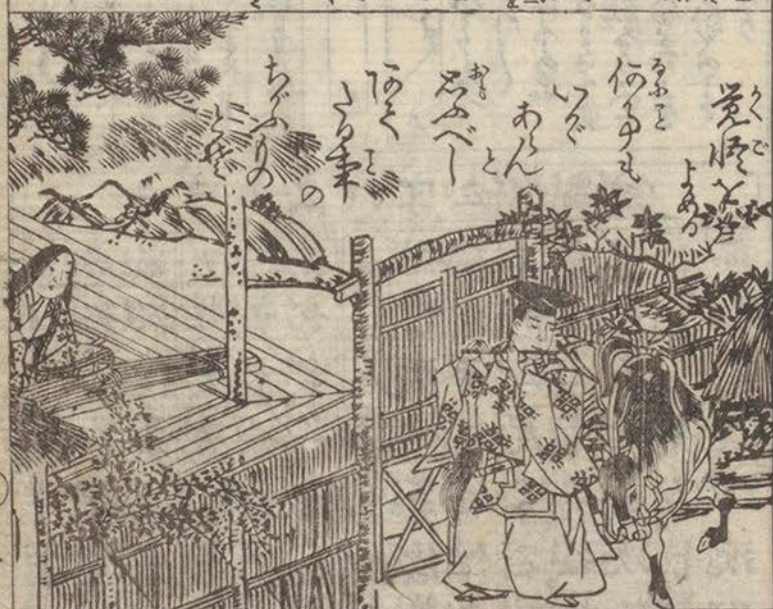
中々不ふあふは
 寸息すんそくと七々しちちわゆる秋
 の穀こくをまきぬりたる
 風候ふうこう昨夜こふ疾はや多おほ
 弥や怨うら露る及およ明あ
 朝あ液えき不ふ我われ不ふ
 天あまの川がはあふふを
 今いま霄せう織おり女を渡わた
 天あま河が臈ら月げつ微ひ
 雲う一いつ似に羅ら

ひそかに一夜毎に金
さかづきのわひる秋
乃かゝるるたのれ
二星遠空未叙
別緒依之根
紫のんかづつた
ふかむとれ
下を空へあふ
去夜残浪霞
空濃紅燭没
流月歎清



ほゑひだ
あゑやんぼろ
よめ
いへよめ
千代もく
なんのやま
でやうぐん不
かへ やん
番あやうく
はつてあさく
うと死へうあ

道々歌
金屋の百子
張の ああ



一 砂^まの^り一^さぢ
一 林^{はやし}ハ^いば^{らう}
一 如^{ごと}クハ^{いん}ろ^ろ
一 如^{ごと}クハ^{おけ}れ^れ
一 如^{ごと}クハ^{くろ}
一 い^きハ^{せき}あり
一 ま^んあ^ごが^うー
一 其^{その}の^いう^{ぐい}と
一 ち^ちハ^{ちや}り^ド
一 お^うぎ^はは^いま^ち
^{いん}ろ^ろ
一 千^{せん}統^{とう}ハ^{さび}の^あ
^{いん}ろ^ろ
一 彼^かハ^この^あ
一 お^うろ^ろハ^いち^じ入^り

三十六教仙圖



三十六教仙圖

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

あしひさの
おのろの
なほくし
ひろりなり

今一丁の



た



た



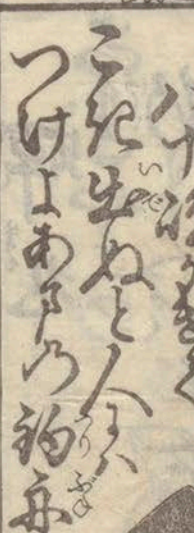
た



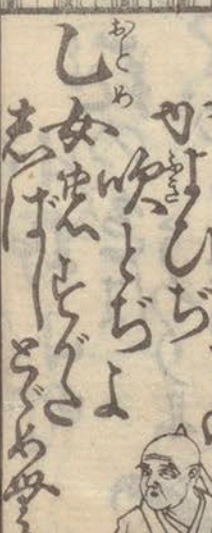
た

た

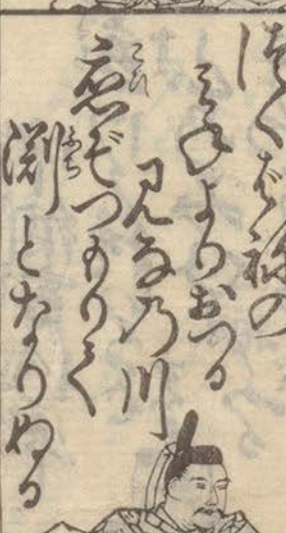
糸織堂



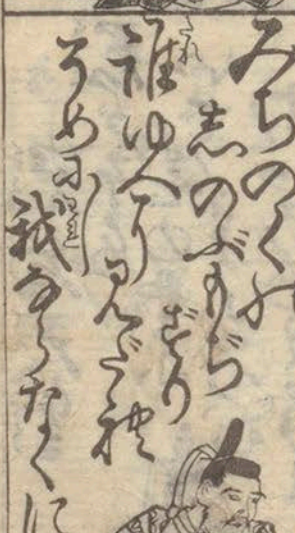
僧正遍照



湯成院



河原太右



難波^{なんば}伊勢^{いせ}
あつたふの
あつたふの
あつたふの
あつたふの



いま
素性法師
今
心と云ふ
ありぬ
の月乃
あはるれ





嘉慶

後志

此

此

泰儀等

あつてさう

人乃あひさ

平たい無む盛もり

思
乃
思
乃

生々々々

人の子を

二月

彭孫

今

の
る

水

清系之輝

油

と東の

たえこ





四月

ふらみ橋に
あやほ
は

り
あ
の
ら
れ



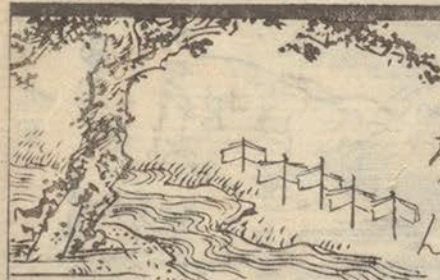
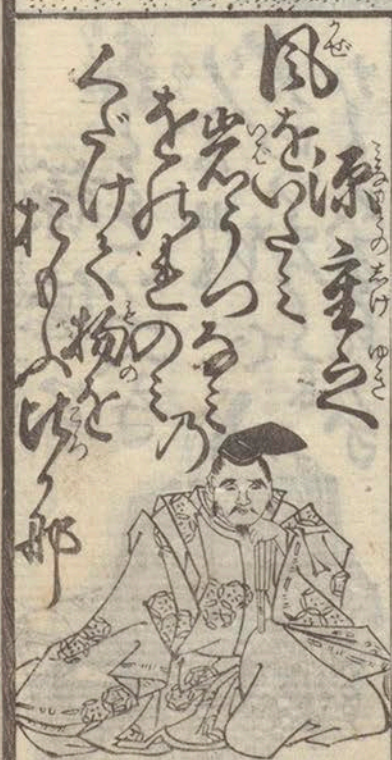
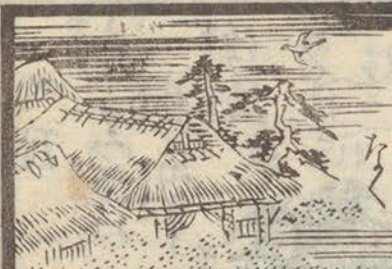
謙徳公
あ
の
う
へ
き



三月

中
の
う
へ
き
あ
の
う
へ
き
あ
の
う
へ
き





あかど まうせ
かぜの やん
うら なる



播磨実方珮長

かきふえやい

子
子
子

まじふ

友東道修長

此本

[illegible]

新古今



右大御道徳母

歎なげきけり

系

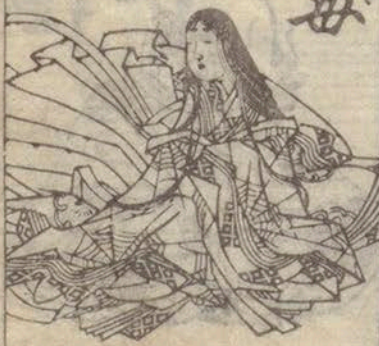
物

儀同三司母

子孫の

心てふを

いふは



八月

望之來家

驅逐
 了
 人
 有
 氣

子
之
心



九月

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ



百

十一

大納言公任

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ



十月

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

おもしろ
き人
の
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ





神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

神門

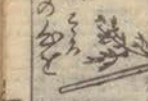
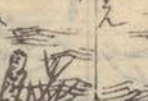
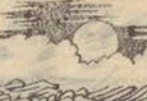
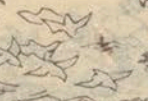
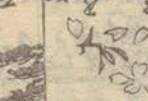
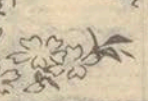
神門

神門

神門

神門

神門



大納言經信

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな



いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

いざねいざな

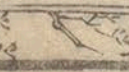
いざねいざな



いざねいざな



いざねいざな



いざねいざな



国屋

あまのり

せいのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり

あまのり



藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

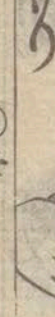
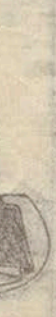
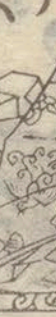
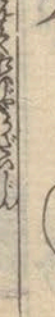
藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊

藤原基俊





三 花菱

がまんをう
す衆の

のり
おの
おの
おの

三 花菱

みち
みち
みち

三 花菱

柏木

のり
のり
のり



三 花菱

む
む
む

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱



三 花菱

三 花菱

三 花菱

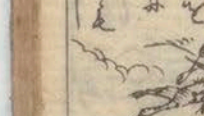
三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱



三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

三 花菱

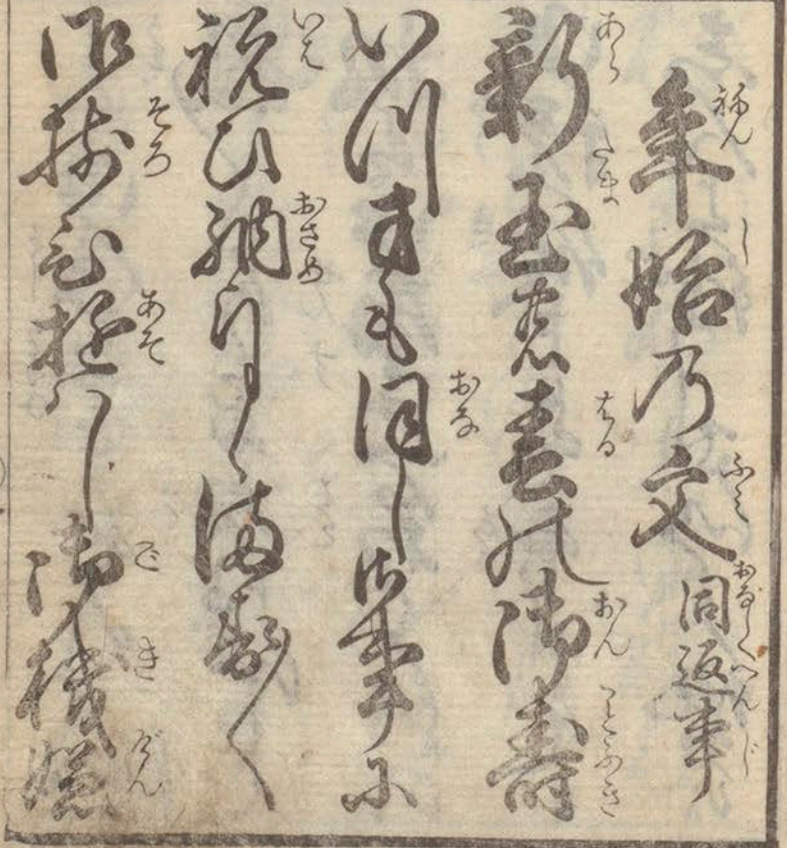
三 花菱

三 花菱



上

上



女學教訓狀

世の中は
 人々世の中に
 おも
 多くありと云
 えり
 りや
 めてと云ふ
 圓光
 生きたる物と
 う
 生きたる人々
 身は

白くはなるの事
 わづ人をまじり
 なぐれ落れし
 袋を棄て置て
 口惜しむ事を
 ふつと行て上へ
 登るに足踏
 とりと矮小な
 心細き先
 もあやうきを

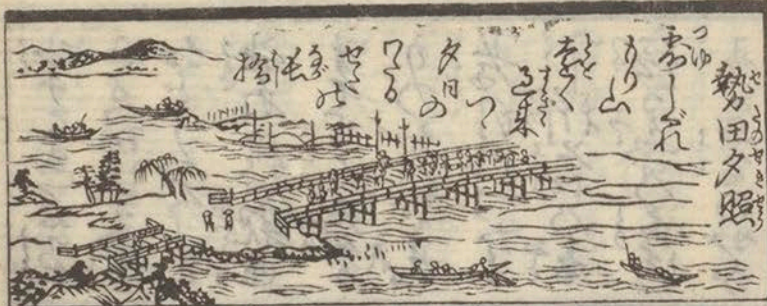
とて
うそ
とて
せんす
とて
あるき
ある

たへん
いふ
かひ

然るに其の如く少くも
 半の如く少くも
 然るに其の如く少くも
 然るに其の如く少くも

眉目細く
 生れはたけ
 如くまけたり
 かねてはたけ
 とのあそび
 佐助のあそ
 乃親類中又
 吾安志をも
 見たりとて
 世にありに

おへくろふ
 出産て文目
 為る心
 娘事
 母に



受てはたけ
 子に
 子に
 子に

事ここへおこ
ふは何じふ
かどうつて
事ね彼親達
までも人々
りのおれを見
考のし一なる
下折言乃者
伝ふぬ乃者
あや等のあ

ふのめあは
文章もあ
かひはえん
おしやえん
ふふあえん
おしやえん
ふふあえん
おしやえん
ふふあえん
おしやえん

沙舌とくあ
ふと相とあ
すも能とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ

ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ
ふと相とあ

[illegible][illegible]

世を法良く
 自らも筆
 年々々々
 石を石
 月を月

[illegible]

今に至るまで
 書かれたる
 経典久し
 なること
 我々も
 知る
 物と雖も
 遠く
 なる
 こと
 なる

世の中此の如く
 なるは世
 なるものぞと
 けりまゝ知ると
 事なれむと
 するれども
 乃て男女の
 源氏物語
 抄の如く
 の語は

等々冊々て
 見る事物も
 おもひやほし
 古より世に
 のちぬ人
 あれ目くら
 清くも暇
 くるくも
 多を盲人
 あまの醫

折る事自ぬる
 一 中 居るあ
 中の一 折 持 ぬ
 何事 中 目 ぬ
 本 中 何 ぬ



中 折 ぬ
 何事 中 目 ぬ
 本 中 何 ぬ

寵ひても何れ
も痛居るもの
がたふと云ふ
ありきと云ふ
眼疾めく医所
を申さん云ふ
と痛ふなり
初より相違ふ
習ふとすれ
ばまはさうふ

見ゆれ目を
わの度とす
は痛ふ事ふ
何と云ふか
うめては身ふ
付くが事と
火を金あは
取居ると云
なくきひて滅
りと云ふは

と云ふ事休了
くえん
少休と云ふ
事九休と云ふ
新一年も忘れ
はあつと云ふ
先んれ

しらあつと云ふ
婚後悦文 何事
一筆と云ふ
昨日と云ふ
婚姻と云ふ
十

世にても人
ももも現世
の末に宝
かまの事
中におもて
は合ふ婦人
もあまの事
なるは二
河神

いふのあまの
ふも宝の
事と山
依と山神
形と山神

女川教訓歌

今川かなを
女誠の行
一帯乃の
一帯乃の
一帯乃の
一帯乃の
一帯乃の

いふのあまの
ふも宝の
事と山
依と山神
形と山神

小事とも思ふおもふ 小考せうこう 何れも詠讀いよみと
 多事とも病びやう かく我われのち とも人々ひとらの
 主親しゅしんの源げんと 忠と長と忠 孝跡こうせき水か事

一 吏とく^{ちり}
一 道王^{みちのう}
一 宗子^{むねこ}
一 西堂^{さいどう}
一 予^よ
一 ひる^{ひる}

一 男姑素来
 一 讀と得中
 一 種子は
 一 男をふね
 一 親類縁者
 一 女をふね

母を四日沙花見
 お月丘立れねと
 子孫をふね
 子孫をふね
 子孫をふね

一 女をふね
 一 女をふね
 一 女をふね
 一 女をふね
 一 女をふね

子孫をふね
 子孫をふね
 子孫をふね
 子孫をふね
 子孫をふね

機りあひく
筆をくく
とをたけり
しをくめり
先家ちう金
共一燕の
人便く
る無
主天の陽
く地を

首書 志 少祝部
長と相くもてらあきく
ト花海くあきく
わ子候 山藏 人々の
くせく 山候く 相

機りあひく
筆をくく
とをたけり
しをくめり
先家ちう金
共一燕の
人便く
る無
主天の陽
く地を

首書 志 少祝部
長と相くもてらあきく
ト花海くあきく
わ子候 山藏 人々の
くせく 山候く 相

乃重を信
て、柔揚を重
む。然るに、又
を重む。これ
女に孝の
方、人仁義
礼智信の五
常何ぞも人
の行ふ道に
あらず。別く

ちやうどいふに
 なるをいれ
 初めよりして
 傳へたふ事
 傳神に傳へ
 ちやうどいふに
 なるをいれ
 初めよりして
 傳へたふ事
 傳神に傳へ

[illegible][illegible]

日來ふゆあふ
 あふふふふふ
 苦ふふふふ
 身をふふふ
 ざふふふふ
 家ふふふふ
 来ふふふふ
 ふふふふふ
 のふふふふ
 ふふふふふ

君と和紙睡と
 よく似て一様
 と歎む山さ
 ねひの心酒
 我れ乃振るむ
 ようは海をて
 正仕の思の
 人よの情やふ
 上其若成嘆
 儼束る終下

人々を以て
之を以て生れり
と云ふも或る
人々とはあり
我々吾人等
かりて義事
これ初より此
義より此殊に
男子共師成
求む是國を助

水乃ふくみくみ
 志乃ふくみくみ
 うらふくみくみ
 うらふくみくみ
 うらふくみくみ

二米財と儲る
乃成習やひ
も有とてと
女子大教人
番之女子に幾
強々て他の
家状家とま
王様ひ男如
はく事あるま
まう新ひ親の

大いれりぬきなりぬ
 おくしなりぬきなりぬ
 なきなりぬきなりぬ
 一なりぬきなりぬ
 多なりぬきなりぬ

珍^{うつく}しき^{もの}ふ^た人^{ひと}
 人^{ひと}恵^{あひ}み^み守^もる^も人^{ひと}
 と^とて^と新^{あらた}下^{した}
 我^{われ}勝^{かち}て^て又^{また}女^を
 を^を好^{この}む^むお^お女^を
 劣^{くわ}る^る女^をと^と好^{この}
 する^{する}貞^{えい}女^{にょ}の^の居^ゐ
 と^とする^{する}市^{いち}の^の世^よ
 かく^{かく}し^しと^とて^と人^{ひと}
 と^とて^と人^{ひと}

是ハ無事有成
 任其自來と
 えゝゝその人
 月より来る物
 心も固くも
 忘人も教へず
 しる何事ぞ
 調ひかゝ我の
 の音も成らぬ
 知らん心は流

人出入の勢に
 とまひておこ
 屋へ又招き
 強きま信を
 あふめ我のい
 西へははれ
 べし世にま
 るはむも滞
 見れはるる
 品とのほろ

まま
 とめ先づし
 ちう
 中えは文 田五平
 年のもははれ
 りをいへる
 そのおん
 其の
 其の
 其の



唐寄夜雨
 秋のふりそ
 名ある
 松の
 沙健
 方
 板
 と
 名
 名
 名

多滞^{おどろ}とて
 ありを徒^{あま}敷^し
 多^おの^の人^{ひと}を^を
 仕^し少^すの^の大^{だい}
 日月^{にちげつ}乃^{なり}草木^{そうもく}
 と照^{てう}給^くふ
 多^おく^くに^に壺^{はち}
 秋^{あき}意^い悲^ひ人^{ひと}
 を環^{めい}して^{して}そ
 人^{ひと}ふ^ふ吾^{われ}と^とを

多きものぞ
 少くも
 せめて世間の
 物なり
 誠なり
 べき事
 情なり
 人なり
 止む

二枚きりなり
又のきりなり
知れぬ
ありきり
親兄弟姉妹
方（つ）の
もあられ紙と
一敷き書も
らきりなり
おれ小き
おれ小き
おれ小き

花女のみつゝとて
 おもひにふれはるゝ
 のまらなれども
 うけあひのほごき
 忘れぬてあゝ
 一ふくむも一ふく
 雲らなく書又一
 くらひの書うもく
 とすくせそ出る
 がほふふぞうも
 やうくこれ書
 面乃一ふあり
 一ふそふた方へあ
 わかるもてふはさ

西へくく 漢にる
 かにきくみり
 小のううくを
 しそりく前
 せうかいを
 新そく見ま
 ぬあふりそく
 傾みそく漢
 かききかうふ
 くそくはく
 一和ふりてき
 多そくげん
 よりそく用み
 せん
 とそくふりて

かりまづ常に出
 たりゆふ下紙のめ
 先^{さき}さねゆきあゆみ
 そくそく又^{また}い裁^きまの
 けくろぬかきとを
 せきつぎに。扱^{あつか}
 。あられの。さきふ
 けい^{けい}かきまづつけ
 て利^りまをとせぬ
 一^{いち}雲^{うん}色^{しき}をあらに
 濃^のい^いやう^{よう}落^おた
 ぬれ^{ぬれ}かり^{かり}きつ
 なる紙^し述^{じゆ}とを
 くてゆふがうぬ

[illegible][illegible]

かくいふめをせはら
 りてふさふはせぬる
 命をいふのせはら
 事なればととあ
 月日をせよ
 一をせよ切をせよ
 人のさへ用米向
 をせよふくもせよ
 てはらふとせよ
 は付もいふせよ
 大切なる用むと
 事なすつらとせよ
 月日をせよ
 一人よりせよ

[illegible]

[illegible]

實に人々を悦ばせしむる
 事なり。斯に而も
 有るまじき事あり
 こととはいふに
 從先方の品より
 いふれどもやまひく
 半也
 一と方(月)年あり
 てみきひを
 出せよとて
 ついの女中を
 此方へのおん
 きて去とて
 中後女中

沙波屋もぬき
 よろしくはうい
 うわくでぬき成
 新よりし
 車後屋へ中根島
 新よりし
 ちのてんき出下
 二家門又八他更
 をとも男のさつ
 つとめあらしに出
 吾利半に文作
 ぐんとおもしろた
 かば細ふといふ
 ゐるり嫁娘を

けしき事や、
 事あるても男乃
 方へ二部よりと
 各より其の要
 には、
 増のあつて、
 市より紙切を
 用ひて、
 封じ、
 引、
 中より、
 中より、
 うづひとさけ
 才一の、
 一、

[illegible]

わくわくするをね
きうぬ^{いふ}家^{いえ}をど
ろくの^{ていつ}何とぞ
ほくと^{いふ}べし
一^{ひと}家の^{いへ}金^{かね}の足^{たり}果^は
然^{しか}る^{こと}なる^{なり}のみ
その他^{そのほか}の^{もの}文^{ぶん}も何^{なん}れ
と云^いふ^{こと}なる^{なり}のみ
此^{こゝ}付^{つけ}の^{ところ}を又^{また}以^{もつ}
て^{して}い^ふことなる^{なり}のみ
近^{ちか}所^{ところ}にも出^でる^{こと}
べし又^{また}人^{ひと}々^{たち}がけ^がて
正^{ただ}しくい^ふことなる^{なり}
是^{これ}よりい^ふことなる^{なり}

休むをてまね
 付くを業のふ
 業も老めし
 うつろふを
 ちやうど
 人さう
 うつろふ
 夫れ地と云ふ
 うつろふ
 夢の可く
 夢の可く
 神明
 仏壇の
 うつろふ
 うつろふ
 うつろふ
 うつろふ

婦人平血和調

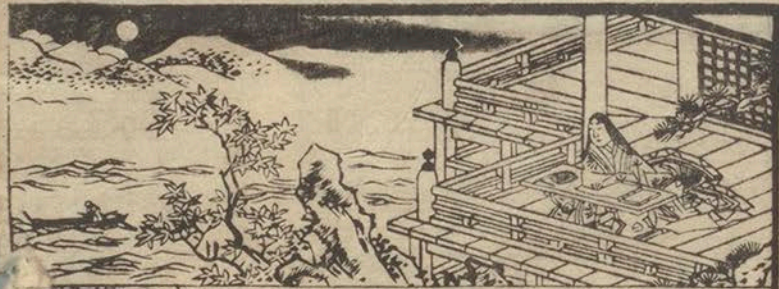
星上うへのふりてな
 まゝ
 ふくを佐ねまひ日
 かちん
 お供のゆりいふて
 うき
 清鏡下ゆふに
 あひそふ
 お流をよけし何浦
 いこ
 るふくと

道はあまのさく女
 子より身かこもいふ
 方より先仿債の業と
 はともなひて治す
 と云ふ人ありとたし
 まとい夫食をせしめ
 て糸作むれば乃樂
 小破るに分りて疲
 れる事多しうと云
 ふ人ありと云ふ者
 もあるなり

女の性情やういふも
さうある人我の
相^{あひ}あひするは来ふ
定^{さだ}まり腹^{はら}さち合^あふ
欲^ほふふやうこそ
死^しとて目^めすも我
身^みをせめて人^{ひと}
邪^{よこしま}目^めを有^あへ何^{なに}を
せくまふて法^{はふ}ま
しき事^{こと}もくと同^{おな}
じ經^{けい}ふやうなうり
縁^{ゆかり}ふふ男^{おとこ}に女^めを
よも誘^{さそ}ふの来^きふ
考^{かん}と方^{かた}父^{ちち}のあり
心^{こころ}く女^め性^{せい}の排^はきもの

ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき
 ちきよもまのほろき

末のちきよも
 使もまのほろき
 まのちきよも
 まのちきよも
 まのちきよも
 まのちきよも
 まのちきよも
 まのちきよも
 まのちきよも
 まのちきよも



歌和の夕三

西行法師
 あき色にちきよも
 秋の夕三

藤原定家
 見まのちきよも
 秋の夕三

寂蓮法師
 秋の夕三



天保九戌年再板
 京都書林芝神町
 和泉屋市吉清梓

